

オルターナティブな発展

有 安 宗 治

はじめに

1 神の国

2 神の国の価値観

1) 統一

2) 安全

3) 正義

1 発展の神話

2 発展と第三世界

3 構造悪

4 経済的搾取と政治的抑圧

5 社会正義と基本的人権

4) 労働

5) 進歩

おわりに

キーワード

- ・ 神の国 (Kingdom of God)
- ・ 社会主義 (Social Justice)
- ・ 労働 (Labor)
- ・ 発展 (Development)
- ・ 共有の経済学 (Economy of Communion)

はじめに

現代世界には個人的悪や構造悪が蔓延している。社会を少しでも良くしようと思っても、

自分たちが既にその社会の体制に組み込まれ、不正の影響を受けていることを自覚させられてしまう。社会の変革どころか、かえって罪意識に苛まれてしまうことが多い。こうした無力感をどのように断ち切ることができるのか。一つには、構造的不正のある限られた側面、すなわち自分の手に負えるところがないかを探してみる。もう一つは、現在の不正な構造にかわる代替案はなにかをを考えてみるのもよかろう。こうした代替案について真剣に考えるには、三つの異なる次元を区別する必要があるだろう。まず、よりよい社会にあるべき特定の価値観を考える。次に、その価値観を社会に実現するための制度や構造はなにかを探る。最後に、そのような価値観や構造を導入し、促進していくための方法はなにかを求める。われわれはここで、神の国という言葉を使って以上のことについて考えていきたい¹⁾。

1 神の国

神の国とは聖書の言葉である。現世での苦しみに耐え、徳をつむことによって来世での報いを得る。その来世が神の国であると、そのように考えている人もいるようであるが、それは聖書の神の国についての誤解であると思う²⁾。

確かに神の国の完成は、来世において実現される。しかし、来世とはこの世とは別世界のことでなく、異なった世界のことである。われわれが求めているのは現世からの逃避でもなく、現世を別のものと取り替えてしまうことでもない。問題は現世に生きる人々のことである。神の国に生きる人々とは、この地上で生きてきた人々である。現世と神の国は直接につながっている。神の国は現世の中に既に始まっているのである。神の計画によって現世が一新され、つくりかえられたときに、初めて神の国は完成するのである。さて、そうすると神の国について語ることは、求められている世界、未来の理想の世界について語ることである。神の国は聖書の中心的概念であり、「神の支配」という表現を用いる人もいる。「神の支配」という表現は、神が望まれるようになる世界という意味であるので、神の国の意味が別の世界ではなく、この現世であることをより良く理解させてくれる。さらに大切なことは、支配という言葉が神の国によって現されていることが、人々の道徳的な振る舞いを変え、ということよりも、人間社会を建て直すこと、あるいは、新しい政治、文化、経済体制をつくることを現していることである³⁾。

2 神の国の価値観

どのような価値観を神の国に属するものとして見分けることが出来るであろうか。それは、人間の魂の最も深いあこがれが、どこにあるのかをつきとめること。聖パウロが言うように、すべてのつくられたものは産みの苦しみにうめいており、われわれも解放を待ち焦がれて、心の中でうめいている⁴⁾。最も大きな不正、虐待、苦難が見いだされるところに、人間の最

も深い切実な望みが体験されるのである。それゆえ、神の国の価値観とよべるものを列挙して、われわれが望み、創り出そうするオルターナティブな世界を細部まで描き出すようにに努めたい。

キリスト者は神の国を実現するように招かれている。教会の第一の目的は、教会そのものを拡大することではなく、神の国を前進させることである。現代世界のどこかに神の国の萌芽が存在し、育っているはずである。キリスト者はそれを識別し、自分のエネルギーを傾けて、世俗世界における共同体としての教会生活において、神の国の芽を育てていかなければならない。以下、現代人の切実な要求を上げ、それらが神の国の価値観とどの様に結び付いているか。また、それらの価値の実現に向けて、キリスト共同体がどのような役割を果たしていくのかを検討する。

1) 統一

現代人が感じている最も深いニーズは統一へのニーズである。過去には、その範囲が地域社会、部族、民族などに限られていたが、現在では全世界的な統一が求められている。その大きな理由は、世界的な交通・通信網とマスメディアが整備されたことによって、われわれが互いに良く知り合い、世界が一つであると知るに至ったからである。そして現実には、世界は相互依存の度合いを深め、国際貿易は贅沢品に限らず、食料や衣料に至るまでの基礎品目を扱う市場になっている。アフリカにおいても過去数年の間に主食に変化が現れ、人々が食べている食料の大半はアフリカ大陸の外から輸入されたものである。

マス・メディアの技術やグローバルな世界経済体制によって、すでに世界は一つになっている筈なのに、まるでそうでは無いかのように世界統一の願いが頻りに語られるのはなぜだろうか。ドナル・ドールによれば、それはマス・メディアや世界経済体制が世界を単一（unified）にしているが、しかし未だ統一（united）していないからだという⁵⁾。経済体制が国際的な規模で機能しているので、世界各国で生産されたものは世界中で何処でも販売されうるであろう。しかし、この取引は誰が示した条件で行われているのか。それは双方に平等な利益をもたらす、真の世界統一の土台になっているものなのか。答えは明らかに「ノー」である。「真に統一された世界というのは、世界のどこに住んでいる者も、互いの結びつきによって等しく利益を受ける世界である。」⁶⁾ そこではあらゆる人々がますます協力し、行動を共にするようになる。しかし、われわれの世界は残念にもそうではない。貿易条件は一方的で、いわば植民地搾取の産物であり、現代ではそれが国際財政や金融体制に管理されて、南に対する北の支配を継続させている。地場産業の犠牲の上に巨大多国籍企業の発展が望まれているような現状においては、物理的・技術的問題である単一化と道徳的な問題である統一とをはっきりと区別する必要がある⁷⁾。人々が探し求めているのは、すべての人々が尊重され、強者が弱者を搾取するのではなく、相互に助け合うような統一化された社会である。われわれがより人間らしく暮らしたいと望むならば、統一化社会を必要とする。このよ

うな本来の意味での統一は神の国の価値観と言えるものである。

キリスト者とキリスト教会の役割は、世俗世界と教会の中に神の国を実現していくことであるから、統一はそして統一を知ることがわたしたちの重要な関心事である。今日の世界において統一を求める運動の動きをみると、大きく二つの種類があるようである。一つは豊かな国とか、権力を持った集団が貧しい国や、弱い集団に統一を一方的に押しつける仕方。他方では、みんなの力で民衆同士が真の一致を促進するような動きである。例えば、人権問題にかかわる国連部局の働きを国際通貨基金の働きと比べてみると、前者はすべての人々の尊重の上に人類の統一をめざしているが、後者は豊かな国が負債を抱える小さな国を支配するための道具でしかない。

統一という神の国の価値観を証しする教会の運動については、顕著な成功を収めていることもあるが、しかし決定的な失敗をしでかしていることもある。例えば、ナイジェリア内戦の最中、信仰の分かち合いと普遍的な仲間意識によって、民族や部族の壁を乗り越えて、生命の危機を感じて逃れる人々に隠れ家を提供するなど、教会が真の民衆の共同体としての役割を果たした。しかし、神の国の統一に反する例として、カトリック教会の制度や法律の面で、第三世界が第一世界との一致を押しつけられる傾向がある。皮肉にもそれは教会の統一を維持するために行われていることである。真の統一、神の国の価値観としての統一をもたらすには、文化や伝統の多様性を認める必要がある⁸⁾。

2) 安全

今日の差し迫った基本的なもう一つのニーズは安全へのニーズである。犬飼道子の世界難民についての記事を読めば分かるように、難民の膨大な人数やその悲惨さは計り知れない⁹⁾。難民を出さないためにも無政府状態にある人々は、無政府状態を終わらせてくれる軍事政権を求め、軍事支配にある人々は文民政府の成立を熱烈に支持する。安全がどれだけ僅かでも切実に求められているのである。

ところが、安全についての現代の課題は、多くの国々において安全へのニーズが一種の集団的パラノイアに高まっていることである。仮想外国からの侵入者に対する安全保障という名目で社会の軍事化が進んでいる。日常のニーズに当てられるべき金や時間が武器や軍隊のために大量に使われ、反乱に備えて治安部隊を強化し、その結果は、弾圧、基本的権利の否定、拷問等に終わっている。安全保障国家は安全保障というイデオロギーによって正当化され、事実上、個人の人権を国家の防衛の下に置き、東と西、南と北の国々がこうした気違いじみた安全保障の擁護に必死である。

このような暴力的手段によって安全を追求するために、力の絶え間なき増強に陥り、軍備拡張競争となる。そして自国の安全のために仕組んだ兵器が相手国の安全の脅威の源となってしまう。国内の治安や個人の安全にとっても同様な罠が待っている。多くの資源が安全を供給するための治安に消費されるようになり、貧しい人々を満たすための資源はますます少

なくなっていく。豊かな者は安全に釘づけになり、貧しい者は貧しいが故に安全の脅威となってしまう。

抑圧なしに、安全は神の国の価値として守れないものか。暴力的手段を用いなくて、安全を確保する方法はないものだろうか。理論的な分野に走るまでもなく、世界各地の人々の暮らしぶりを眺めるだけで、不当な抑圧によらず、安全のニーズを満たして来た国々があることが分かる。そのようなケースは、相互の信頼と尊敬という伝統が生きている社会にみられる。しかもそれは、人々の人間的な関係だけではなく、さらに政治、経済、社会、文化、宗教といった制度や構造によって相互信頼や尊敬の態度が育まれるのである。そのような伝統の中に築かれる安全の基盤となるのは、人々が自分の所有や社会的地位に対して公正な満足が得られることである。そして、その満足を提供し支えるものは社会正義である。なぜなら、一般的に人々は万人に利益となる体制を尊敬し、支持するときに、互いに信頼し合えるものだからである。その意味で、最も長期的に尊敬と相互信頼を安定的に支えるのが社会正義である¹⁰⁾。

3) 正義

未だ曾てないほどに強い正義への要求がある。まずは、発展という過程が社会の不正という問題をどれほど悪化させて来たかをみよう。

(1) 発展の神話

過去数十年間の開発のプロセスは工業化の中心であるヨーロッパ、北米、日本から第三世界、それから第一世界の周縁の国々へと広がっていった。このプロセスは進歩を達成し、貧困を克服する唯一の道だと思わせる神話となって推進され、急速な経済発展が続けられた。しかし、その代償として莫大な人間と環境の犠牲が支払われている。勿論、ある地域では経済活動が伸びて、多くの富の供給がなされるようなこともあったが、アフリカの多くの国々では伝統的な自給経済が崩れ、権力者への報酬の見返りとして国の資源を搾取するような経済体制が敷かれた。それがあまりにも異質なために発展の名目で行われた搾取もうまく行かず、政府の発展政策は国家にとって成功した方がよいのか、失敗した方がよいのかさえ断言しにくいところである。

大部分の第三諸国においては、発展計画の経済的成果は以上の両極端の中間にあるようである。しかし石油や鉱物資源など容易に利用できる資源が不足しても、発展のプロセスを維持できるかどうかは大いに疑問視される。また、輸出向けの農産物の生産は大幅に拡大しているが、市場価額が極めて不安定であり、暴落することもある。

開発のプロセスがうまく行ったとしても、より貧しい国々の人々の生活全般に対して発展は問題を引き起こす。まず、新しい富が産出されても、富が公平に分配されないので、第三世界の国々においては貧困は依然として克服されない。次に、工業化が進んで人々の生活水

準が全般的に向上しても、労働組合への参加の権利、適切な安全基準を求める権利、政治活動に携わる権利等が侵害されて、基本的人権が殆ど認められない¹¹⁾。さらに、第三世界は第一世界よりも環境破壊に関する規制が厳しくないで、開発事業によって天然資源が枯渇し、しばしば産業廃棄物の有害な汚染を大地や水や空気が負わねばならなくなる¹¹⁾。

(2) 発展と第三世界

なぜ、それでは問題の多い発展計画を無批判に第三世界の国々は受け入れるのか。それには二つの理由がある。一つは、これらの国を代表する人々が少数の特権階級の人々だということである。かれらは例え国全体に開発が問題を起こすとしても、それが始まるまでに、短期間には膨大な利益を自分たちに得させることができると思っている。第二には、彼ら支配集団が発展の神話を信じ、それを国民大衆に売り込むことに成功したこと。発展の神話とは、第一世界が世界の導き手であるという信念である。今度は自分たちが、第一世界と同じ道を通して豊かな強国になるのだと思っている。しかし、西洋諸国と同じ道を通して、他の国々が発展できると言うのは誤りである。

西洋諸国の発展の歴史の核心には、かれらの踏み台として多くの未開発の国々が存在したことを忘れてはならない。植民地体制の目的のすべては、南の国々を利用して、北の国々が豊かになることであった。この目的はそれぞれの時代に、それぞれの方法で実現されたのである。初期には貧しい国々は奴隷として安い労働力を提供し、産業革命期にはヨーロッパ諸国に対し植民地としての安い原材料と格好の市場を提供した。先進国にエネルギー資源が不足し始めたときには、石油、ウラン等の安い資源の原料を低開発国が提供した。再度、先進国は第三世界の安い労働力を利用している。まずは、多国籍企業によって安い労働力を雇用し、次に北への移民労働者を安価な賃金によって工場やサービス産業の下働き等に従事させている。

ところが、第三世界が搾取されたのと同様に、第三世界が搾取できるような未開発の地域はもはやこの地球上には残っていない。第一世界にとって全く巧く行った搾取のパターンはもはや繰り返されることはできないのである。したがって、貧しい国々が、豊かな国々の発展して来た同じ道を通して発展することは不可能に近いのである。ピラミッドの頂点に座る人々や国々の数は少数に限られており、しかも彼らが頂点にいるのは、底辺に他の国々や多くの人々がいるからである。発展が個人にとって利益になるか、不利益になるかは、その人が社会のピラミッドの中で占める位置に掛かっている。頂点の5%以内であれば、発展は富と権力の大幅な増大を意味し、中間層であれば、生活水準の大幅な向上を意味する。底辺にいる人々にとっては、発展とはますます社会の周辺に追いやられること、貧困だけではなく、声も出せなくなる程の状態になる。頂点の5%以内は第一世界も第三世界も同じ、中間層は第一世界は65～70%、第三世界では人口の15%を占める。底辺層は第一世界で20～25%、第三世界では人口の80%にも達する¹²⁾。

（3）構造悪

発展と呼ばれる過程は伝統的な経済構造を近代的な構造と取り替える過程である。この取り替え作業の結果、少なくとも社会正義を保証していたチェック・アンド・バランス機能が働かなくなり、弱肉強食の機会ばかりが増えてしまった。こうした現象は急激な社会変化が起こるときに生ずるものであるが、しかし多くの国が喜んで発展モデルを取り入れるところから事態が悪化した。企業家が高い利益をもとめ、経済の急激な成長を重視して、それを優先することから、富のよりよい配分が後回しにされる。発展の体制は豊かな者、権力ある者を更に有利にし、その理論は貧富の差の拡大を正当化するのである。

第三世界の貧困に残された簡単な解決方法はない。発展過程は貧しい者を更に貧しくする。現在、世界で社会正義の問題に取り組むことは、現在の発展モデルを根本的に問い直し、それが人間の生活にとってどれほど有害であるのか、それによって約束される未来がどれほど緩慢であるのか、どれほど多くのまた深刻な障害が現在そこから生じているのかを噛み締めることである。権威ある科学者やヨハネ・パウロ二世のような思慮深い指導者の指摘によれば現在の発展とは以下の通りである¹³⁾。

- ・ 発展開発は貧困の問題を解決するどころか、かえって貧富の差を拡大させている。
- ・ 発展開発は非西洋民族の伝統的な文化を脅かし、経済・社会構造を崩壊させて、多くの人々を無力にし、自分たちの生活を決定するチャンスを彼らから奪っている。
- ・ 発展開発は仕事の極度な専門化を要求し、多くの人々は自分の仕事の喜びを感じず、仕事からの疎外を感じずる。
- ・ 発展開発は大地や空気や水を汚染し、環境破壊の脅威となっている。
- ・ 発展開発は地球の資源を枯渇させる。また、希少資源の入手に当たって国家間の激烈な競争を招き、軍備競争の原因となる。軍備競争は資源を浪費し、人類を絶滅の危機に陥れる危険がある。

現在主流の発展のプロセスの中には、これらの人間生活をそこなう問題点の殆どを生み出している二つの致命的な欠点がある。第一の欠点とは、このプロセスが無制限な成長命令を含むシステムであるということである。ブレーキのない非常に強力なアクセルだけの車のように、ただ成長を命令し、どこまでも走り続ける。それは、一度国家の経済成長率が低下すると、発展のプロセス全体に支障が生じ、完全な破産の危機に曝されるからである。それは世界経済全体にとってもそうであり、また個々の企業についても当てはまる。この無制限の成長命令が経済成長を促す動機づけとなっている。

第二の欠点は、競争体制において認められ、報われる唯一の美德が強さであるということである。人間性を大切にすることや、社会福祉への関心や、環境保全への配慮などは弱さになる。それらは勿論、社会関係を円滑にするためには価値のあることかも知れないが、しかし競争体制の原動力という観点から見れば、そうした配慮は最小限度に留められておればよい。それに対し、利益拡大への新しい技術の導入を遮る規制などは存在しない。新しい発明

が強大な企業連合の利益を脅かすのであれば、導入されないかも知れないが、人々の職業を奪うという事実があったとしても、その導入が遅らされるということはない。つまり、この体制は自分自身を守ることが出来るが、自分のために働く人々を守ることができないのである¹⁴⁾。

成長命令と競争のために、政府機関でさえ失業を作り出すような政策をとらねばならない。仕事を節約する方法は産業の効率化、つまり、新式の機械の導入によって多数の人員余剰を認めることである。他国に負けないように業界が競って新しい技術を導入し、失業を増大させる。技術革新と失業の増大は螺旋階段のように上り続ける。この恐ろしい非合理的な行為を人々は合理化と呼んでおり、その合理化に反対する人は非合理だとされ、無責任だとレッテルを張られる。技術革新と失業の増大は、軍事競争と同じような狂気じみた論理をもって進む。そして、そのプロセスが不可欠とされるのは、誰ひとりとして競争体制全体の前提を疑う人がいないからである。

競争は、自由な選択の機会を人々に与えるから正当であると言われる。確かに、どのメーカーにするか、依頼手を選択するについてはさほどの制約はないであろう。しかし、われわれにとって本当に重要な選択の機会を競争体制は与えてくれない。たとえば、効率的な公共の輸送体系を選ぶか、それとも無駄の多い個人輸送の急増を選ぶか。環境を大切にし、資源を保存できるライフスタイルを選ぶか、それとも無用の品々のために資源を浪費するような生活態度を選ぶか。多くの人々が職業につけるような適性技術を選択するか、それとも大量の失業者を出す高度技術を選択するか。実は、このような選択こそわれわれにとって真に重要なのであって、トヨタにするか、それともフォードにするかと言った選択はさほど重要ではない。現在の発展のモデルには「ストップ」をかける時期が来ていると思う。そしてオルターナティブな発展のモデルを提示すべきである。ロボットの生産ラインへの導入が何百万人の労働者から職業を奪ったが、当然この生産体制の論理は問い直されねばならない。さらに、多くの人々から基本的な労働権を奪うような高度技術の利用を各国が合意して規制すべき時ではないかと思う。発展はもはや誰れからも支配されることのない獣のような存在になってしまっている。この獣は諸国を餌食にし、数知れない伝統文化を崩壊し、西欧的な経済的・文化的帝国主義を打ち立てようとしている¹⁵⁾。

(4) 経済的搾取と政治的抑圧

現在の発展のモデルは資本主義のアプローチや哲学と密接に結びついている。また、第三世界は大部分が西欧資本主義の産物である。したがって、われわれの発展批判は実際には資本主義批判である。しかし、われわれは資本主義よりも第二世界がとっている国家社会主義をより好むわけではない。また、われわれが求めているオルターナティブな道は共産主義、あるいは社会主義的な道ではない。

共産主義諸国でとられている発展へのアプローチは、西洋の発展モデルの一変種であって、

根本的にオルターナティブなものとはいえない。共産主義者の統治者たちは西洋の経済担当者や政治家と共に多くの前提や優先順位を共有しているし、西洋の指導者たちと同様に、生産を上げることににかかわってきた。かれらは西洋の同業者と同じく、地球から石油を採掘するプロセスを生産と名付け、強力な中央集権化体制を敷いて、西洋に追いつき追い越せでやってきた。技術、エコロジー、国民の政策決定など、どの面をみても西洋世界にたいしてオルターナティブな道は取り入れてこなかった。特にかれらは、西洋世界と同類の権力ピラミッドをもっている。

共産主義体制は資本主義にたいする一つの反動であると思われる。共産主義者の目標は社会における富のより公平な分配であったが、この目標は国家社会主義体制を作り出すことによって驚くほどの成功を収めた。しかし、一般市民は依然として支配されている。支配の原因は、財力ではなく、政治権力である。西洋資本主義においては、財力をもつ者が生活領域の権力を金で買うが、東欧では、共産党における権力が他の領域における特権を得る手段となる。どちらの体制も構造的に腐敗している。共産主義国家は政治的抑圧によって人々の基本的権利を破壊し、西洋自由主義国家は経済的搾取によって人々の基本的人権を損なっている。第三世界の右翼独裁的体制においては両体制の政治的抑圧と経済的搾取が併存している。現在の政治環境においては、東西の権力者は自分たちの体制が相手と全く異なっていることを強調している。それは、われわれが一方を拒否すれば、もう一方を選ばなければならなくなるようにするためであろうか。しかし、われわれの選択はそのような制限を受ける必要はない。われわれはそれらとは全く異なった価値観、神の国の価値観を検証し、それがわれわれの社会でどのように実現されるかを考えて、オルターナティブな道を選択するからである¹⁶⁾。

(5) 社会正義と基本的人権

以上みて来たように、現代の経済発展プログラムによるグローバルな経済的不正に対応して、正義を求める声も世界的規模のものになってきた。真に人間的な世界とは、正義が人間世界のあらゆる面に行き渡ることである。地域的、国内的、国際的に正義を求める非暴力的運動が続けられているが、不正もかつてないほどに強くはびこり、権力者の暴力によって大規模な抑圧を受けることも少なくない。

社会正義の問題は、基本的人権という言葉で最もよく表現される。社会の政策決定に対する発言権、不当な逮捕や拷問からの解放などの政治的権利や、労働や最低賃金を得る権利、無償で教育を受ける権利など個人や家族についての権利、世界市場での適性価額や市場参加の権利、先進国によって独占されている技術にあずかる権利など貧しい国々の権利、さらに国際金融制度の政策決定に関する発言保障の権利が南の国々から要求されている。また、近年では、文化的権利も重要視され、国内における小集団の権利を大切にすることや、小国が大国の文化帝国主義から守られる権利というものもある。

世界のキリスト教会は、三十年来、神の国がどこで実現しているのかを識別してきた。こ

のプロセスは、「時のしるしを読む」といわれるが、その「時のしるし」の中で最も重要なものとなったのが基本的人権を求める闘いである。そのことを一人ひとりのキリスト者もまた教導権も認めるようになった。その結果として、大部分の教会が倫理的教えの強調点を大きく変えるようになったのである¹⁷⁾。これまでは倫理の問題は純粋に個人的・対人的関係に属する事柄に焦点を絞ったが、これからは構造的正義にかんする問題全般と人権の問題に集中するようになった。

正義という神の国の価値観についてキリスト教会が果たした主な貢献は二つある。一つは真に公正な社会とはどんな社会であるかを明確にしたこと。つまり、社会正義を成り立たせるさまざまな要素をとりあげて、最も簡潔な定義を提示したことである。即ち、「世界が求めているのは、公正で参加的で、持続的な社会」¹⁸⁾である。この表現の特徴は、正義を単に物財の公平な分配だけではなく、さらに、一般市民が自分たちの生活に影響を及ぼす意志決定に積極的に参加すること、としたことである。特に、地球の大切な資源を浪費しないで、未来の世代に対しても公正であるようにと要求していることである。第二の貢献は貧しい人の選択である。富みと権力をもつ者は、「すべての人の機会均等」という決まり文句を用いて、自分の優位を正当化することができる。それゆえ、社会正義を実現する希望が失われないためには、貧しい人々に特別な保護を与えるように経済、政治、文化の全領域において行われるべきである。教会はなぜ、貧しい人々の選択を行わねばならないかということについて、堅固な聖書的・神学的論拠を提供すると共に、多くの国々において彼らの代弁者となって、社会正義や基本的人権の要求を述べてきた。社会の権力者たちの立場を正当化することを止め、社会の犠牲者たちが自分たちの惨めな境遇から抜け出ることができるように助けようとしている。ラテンアメリカにおいて起こったことについてペリー・レルヌがその著『民衆の叫び』の中に詳述しているが、同様に教会は南アフリカやフィリピン等においても抑圧者の側ではなく、抑圧されている人々の側に立っている¹⁹⁾。

4) 労働

労働は神の国の価値観の一つである。失業が労働者から生活の糧を奪い、その家族を精神的に破壊してしまうように、労働は人間生活にとって基本的なものである。神の国の労働とは、貧しい国々で働いている小作農の苦役や、人間をロボット扱いにするような生産ラインの単純な作業ではない。「神の国の価値観としての労働とは、作る、形を与える、発明する、創造するという人間の能力を行使することである。存在に命を吹き込む大地の力にふれ、それを汲み上げることである。他の人々と力を合わせて、より人間的な世界を築くという使命に参加することである。労働とは、ある大きな事業に自らも参加するという人間性の根本にかかわる体験である」²⁰⁾。労働とは、神の創造の業に参加し、自然を通してより人間的な世界を築こうとする人々の共同作業であり、人間性の根本にかかわる体験である。それは、どのように小さなことであっても人間の働きを形として残すと云うことにおいて、非常に重要な

意味をもっている。

しかし、現代の労働は神の国の労働とは余りにも掛け離れている感じがする。現代人の労働様式は次の三つに分けることが出来るようである。一つは骨の折れる肉体労働。もう一つは、機械相手に頭を使わない反復作業。最後は失業。現在の不景気の状況下では、平成 11 年 8 月 31 日現在、失業者の数は急増し、愛知県内で完全失業者が 4.4 %、全国では 4.9 %、319 万人にのぼる。機械の使用によって労働はますます非人間的なものになり、生産物からの労働疎外、社会関係からの集団疎外、自分自身からの人間疎外という、疎外状況が展開されている。管理職にある人々は、疎外された労働力との緊張関係に悩まされながら、冷酷な企業競争にとらわれ、生き残りをかけて会社の合併等に励んでいる。しかし、失業や余暇に生きる人々は、生活に労働というチャレンジが欠落し、しばしば無気力に陥り、酒や麻薬等の浪費に気晴らしを求める有り様である。

このような状況とは全く異なった生活様式を切り開くために、キリスト者のコミュニティはなにかできないか。適性技術を利用した、より健康的で、資源を浪費しない質素な生活を送るオルターナティブな道を切り開いてはどうか。Chiara Lubich 女史によって始められたカトリック教会のコミュニティ Focolare 運動は、万民のキリストにおける一致をめざして、現在 182 ケ国に及んでいるが、「共有の経済」という貧しい人々に与え、分かち合うための経済活動を始め、745 社が加盟して、30 ケ国で活動している²¹⁾。また中国では、指導者や知識人は一定期間を農場で働かねばならないようになっているという。エリート主義を打破し、さまざまな労働者とのギャップを埋めるための抜群の方法だと思う。これを「時のしるし」として受け取り、同じようなことをすれば、われわれの間に連携の絆を生み出すことができ、それが生活の中でかかわる種々の仕事によりよいバランスをもたせてくれるであろう。

5) 進歩

進歩という言葉ほどやかましく使われる言葉はない。どこの国でも、どの民族でも、ものごとがもっとよくなることが当たり前のことになっている。特に現代の人々が期待するのは、終わることのない改善や、後戻りすることのない発展である。世界が進歩し、改善されるということは誰もが希望することであり、その意味で進歩は神の国の価値観であると云わざるをえない。しかし、世界の現状をみれば、進歩は多くの人々にとって最も悪い意味において神話となってしまっている。終わりのない改善という約束を果たさなかったばかりではなく、人々を残酷にも欺いてしまった。第三世界の人々は、進歩のために自分たちの生活の仕方を捨てるように云われたが、その見返りとして約束された利益は実は幻に過ぎなかったのである。第三世界の人々は、それまで高齢者、弱者、貧しい人々の防波堤となってきた伝統的な社会構造を失った。過去の権威の在り方は崩れ、親や年寄りや若者たちを教える立場にはない。世代間の断絶は文化の断絶となり、道徳は力を失い、伝統的価値観は消滅し、日和見主義だけがはびこっている。官僚や役人は職権を乱用し、ビジネスにも政治にも教育にさえ

も賄賂や汚職が蔓延している。こうして得られた進歩とは、少数の特権的な人々や集団に限られており、かれらに多くの物質的利益と途方もない権力とを与えた。大衆にとっては良い結果は無いに等しい。たしかに、西洋医学は多くの病人を救い、幼児の死亡率は低くなった。しかし、その恩恵は一貫した社会福祉制度として機能してはおらず、その結果、幼児の死亡率の低下によって人口爆発が起こり、貧しい国々はますます貧しくなる。さらに西洋式の学校制度についてであるが、ドナル・ドールの体験による発言からすれば、特権階級とそうでない人々とのギャップを広げ、「教育の名に値しない」ということである²¹⁾。学校には、社会において特権的な位置を占めている人々の子供たちがますます増えて、学校はいわば特権階級に卒業証明書を発行する機関となっている。

近代化した北の国々においては、進歩の恩恵は国民の多くの人々に現れている。しかし進歩の代償もまた、かなりの人達の間に現れている。彼らは進歩の恩恵がまだ行き渡っていない人達と云うよりも、進歩の恩恵の犠牲者となっている人達である。人類の圧倒的多数を占める第三世界の貧しい人々と共に、彼らもまた北の多数の人々の利益の代償を支払っているのである。さらに、進歩の恩恵は未来にツケを払わせることを前提に得られる。巨額の債務と貴重な資源の浪費を未来の世代に負わせる形で、われわれは利益の代価の支払いを求めているのである²²⁾。

おわりに

世界の貧しい人々が必要としているのは、そのような進歩ではなく、むしろ抑圧からの解放である。現教皇ヨハネ・パウロ二世も非人間化をもたらす進歩を痛烈に批判しているし、世界キリスト者協議会も同様に厳しくそのような発展を拒否している。西洋的な経済搾取によるのでもなく、また東洋的な政治的抑圧とも根本的に異なったオルターナティブな発展、現代社会における神の国の価値観である統一、安全、正義、労働、進歩を目差した真に人間らしい発展を求めようではないか。

注

- 1) 平成12年より、筆者は愛知学泉大学コミュニティ政策学部 to 所属することになる。よりよいコミュニティの生活をめざして、正しい社会観や社会構造を求めていかなければならない。筆者はキリスト者であるので、聖書の神の国の概念の検討から始めたい。神の国は例え話を中心に述べられており、その意味するところは多義にして深淵である。われわれはドナル・ドールにしたがい、貧しい人々の選択に関連して社会的意味を明らかにして行きたい。cf. Donal Dorr, *Spirituality and Justice*, Gill and Macmillan Ltd., 1984
- 2) Ibid., pp. 138-139
神の国は、神が「こうあれ」と望むとおりの世界である。現実の世界はそのような状態ではないが、イエスの神の国の宣言は、世の中を変える、そのために神の力は働いている、神の力は社会を支配して

- いる悪の力よりも偉大である。イエスが語っていた神の国は、この世における神の支配である。そうでなければ、次のイエスの言葉は全く理解出来なくなる。「神の国はすでにあなたがたのところに来ている」（マタイ 12・28）「神の国は、実にあなたがたの間にある」（ルカ 17・21）「この聖書の言葉は、あなたがたが耳にしたこの日に、成就した」（ルカ 4・21）
- 3) Ibid., pp. 137-145 ; Michael H. Crosby, *Spirituality of the Beatitudes : Mathew's Challenge for First World Christians' Orbis*, Maryknoll, 1981, p. 56 「すでに実現された未来」という表現は、イエスに当てはまる真理である。イエスは未来の神の国の価値観と基準にしたがって生きた。イエスは神の国がすでに来ているかのように生きた。そのように生きることによって、イエスは神の国を現実のものとしたのである。
 - 4) ロマ 8・22
 - 5) ドナル・ドール, 山田経三 翻訳, 『時代が求めるキリスト者の生きかた』, 女子パウロ会, 1992, 再版, p. 151
 - 6) Ibid., 世界の単一化と世界の統一化の違い。前者は単にある経済体制が国際的規模で機能していることを指す。たとえば、日本製のオートバイや米国製の缶入りスープは何処でも買うことができるし、またアフリカで栽培されたカカオはアメリカでもヨーロッパでも売れる。しかし、その取引は誰が示した条件で行われるのか。真に統一された世界は、世界のどこに住んでいようとも、互いの結びつきによって等しく利益を受ける世界である。
 - 7) 猪木竹徳, 「協調と国家の壁」, 『新しい産業社会の条件』岩波書店, 1993, pp. 125-159
 - 8) ドナル・ドール, 『時代が求めるキリスト者の生き方』 pp. 152-154
 - 9) 犬養道子, 『飢餓と難民』, 岩波ブックレット No. 112, 1989
 - 10) ドナル・ドール, 『時代が求めるキリスト者の生き方』 pp. 155-157
 - 11) アメリカ・カトリック司教協議会, 「人権・共同体における生活の最低限の条件」, 『万人に経済正義を』, 中央出版社, 1988, pp. 90-93 基本的人権は、人間の尊厳, 社会的連帯性, および正義を尊重する社会組織に対する最低限の条件であり、個人とその家族に充分な健全な労働条件, 賃金, 給付の権利や財産所有の可能性の権利を必要とする。
 - 12) 初川 満, 「発展と人権」, 『権力と市場経済』, 経済社会学会年報 XVI, 1994, pp. 156-167
国際社会における先進国の経済的かつ軍事的優位性と、東側の崩壊による発展途上国の孤立化を考えると、南からの発展についての主張は再考の価値がある。
 - 13) Ibid., pp. 158-160 北は、経済成長は Basic Needs の充足にあり、南の国民に対して生存のための最小限度の必要を提供すればよいと考えた。南は強い疑いの目をもって見ていた。
万人に正義をもたらす義務ということは、貧しい人々こそが最も緊急な経済的要求を持っていることを意味する。教皇ヨハネ・パウロ二世は、「貧しい人びとのニーズは、金持ちの欲望よりも優先します。労働者の権利は、利潤を最大限にすることよりも、環境の保護は、工業の規制のない拡大よりも、社会的ニーズを満たす生産は、軍事目的のための生産よりも優先します」と云っている。アメリカ・カトリック司教協議会, 『万人に経済正義を』 p. 99
 - 14) 間 宏, 「企業間関係と労使関係」, 『経営社会学』, 有斐閣, 1997, 新版第一刷, pp. 241-248
 - 15) 黙示録 13・1-14
 - 16) ドナル・ドール, 『時代が求めるキリスト者の生き方』, pp. 107-109
 - 17) Ibid., pp. 158-160
 - 18) Ibid., p. 159
 - 19) Peny Lernoux, 'Cry of the People' 2nd ed., Doubleday and Penguin, 1982
 - 20) ドナル・ドール, 『時代が求めるキリスト者の生き方』, p. 163
 - 21) キアラ・ルービックがドイツのストラスブルグで開かれたヨーロッパ協議会で行った講演の資料。Chiara Lubich, 'L' esperienza Economia di Comunione : dalla spiritualita dell'unita una proposta di agire economico, Strasburgo, 31 maggio 1999 (共有の経済体験：一致の霊生からの経済行動の提案, ストラスブルグ, 1999年, 5月31日)
 - 22) ドナル・ドール, 『時代が求めるキリスト者の生き方』, p. 166
 - 23) 発展途上諸国は工業諸国に従属している。その相互依存の関係において、世界人口の約半分、ほぼ 25 億人が年間所得 4 百ドル未満の国々に住んでいる。それらの国々の 8 億人が絶対的貧困のうちに生活

し、5億人が慢性的な飢餓に苦しんでいる。アメリカ・カトリック司教協議会、『万人に経済正義を』,
p. 194